鍛え抜かれた自然体

王貞治選手

1977年10月13日

1977年9月3日、ハンク・アーロンの持つ通算本塁打記録を抜く756号を打ち、王選手は「世界の王」に。

世界記録に向けて世の中が大いに沸き立ち、国民栄誉賞も受賞したこの年、クラブでも「時の人」を招いた。話題は野球以外にもおよび、人柄を感じさせる会見となった。

© 日本記者クラブ

本日はお招きにあずかり、大変光栄に存じております。ふだんたくさんのスポーツ記者の方がたと接触しているのですが、今日はちょっといつもと感じと違いまして、緊張しているようです。今年は756号という、まあ、数字の上で、世界記録ということで日本中の皆さんから、本当にあたたかいご声援をいただきました。昭和34年に入団しましてから19年、いろんなことがありましたが、今年がやはり最良の年といってよいのではないかと思います。昭和34年に右も左も分からない高校出で、なにかおじさんたちの集団の中に入ったみたいで、ベンチの隅で小さくなっていた自分が、今ここで、皆さまからもお招きにあずかって、こうやって話をさせていただけるようになれたということ、これは本当に運がよかったの一語につきると思います。

野球を志して、その道に精進した選手はたくさんいると思います。が、その間にいろいろなアクシデントあるいは体の故障ということで、志半ばで断念せざるをえなかった選手も多いと思います。

それからよい環境に恵まれたということですね。巨人軍という伝統のあるチームに入りまして、厳しい練習と人間として生きていくのに必要なもろもろのことを教えていただきました。

また、厳しい練習についていけるだけの頑健な体も両親からもらったものです。自分が頭で考えて、自分でわかったことというものは、ほんのささやかな部分だと思います。やはり、基本的な体力そのものに恵まれたことが一番でなかったか、と思います。大きな怪我もなく今年も130試合全部に出ることが出来ました。私が入団した頃の37才の選手というと、本当にもうおじさんというか、まぁ、野球選手の感じがなかったのですが、今、自分が37才になってみまして、気持ちは入った時とちっとも変わっていません。むしろ、毎日毎日の仕事の楽しさとか厳しさとか、そういったことがわかりまして、今、現在の方が一日一日が充実しております。これからも体の続く限り、ファンの皆さんの期待に答えるべく、ホームランはもちろんですが、皆さんによろこんでいただけるようなプレーを心がけてまいりたいと思います。僕の話としてはこれぐらいにして、後は皆さんからご質問を受けることにさせていただきたいと思います。

質疑応答

問　新聞なんかに出ていることかも知れませんが、視力はいくらですか。

王　視力は1．5と1．2です。

問　目がやっぱり非常にいいんじゃないかと思って……。

王　そうですね。やはりまず眼で捉えて、それからですから。小さい人達に野球のことについて話す場合、まず一番最初に、特にバッティングのことですが、よくボールを見るということを話しますね。やはり、これがまあ基本じゃないかと思います。

問　長島さんなんか、こうやって、キャッチャー・ミットに入るまで見送っていたようですね。

王　はい。やはり、それだけ、執念というんでしょうか。張本選手もよくいいますが、その、キャッチャーのミットへ入るまでが勝負だといいますね。ですから、もし自分のタイミングがはずれて、ストライクを見のがしてしまう場合は、キャッチャーのミットに入るまでに、何とかして当てようとしますね。ツー・ストライクの場合なら、当てれば、もう一回打てるチャンスがあるわけです。自分の打つポイント以降はもう仕方がないと思う人とでは、大きな差が出てくると思いますね。

問　球がよく止まって見えるとか、縫目が見えるとかいいますが、本当なんですか。

王　そうですね。まぁ、それぐらいによく見えるということですね。確かによくホームランが出るときというのは、「どうぞ打って下さい」という感じでボールが自分の方へ向かって来るわけです。ところが、打てない時というか悪い時は、本当に自分が到底手も出せないような感じの速さに感じまして、また、あのベースの幅も決まっているんですが、これが倍にも３倍にも広く感じられるんですね。調子のいい時というのは、すごく狭くて、自分がストライクかなと思って見逃しても、審判が「ボール」といったりするんですが。

同じ距離で、同じ幅のベースで、常に一定の間隔でやっているんですが、その時の調子によってはずい分変わって来ます。

問　あの、スランプの時ですね。結局どういうところが悪かったわけですか。

王　そうですね。やはり、打ち方が悪くなっているわけなんですね。忘れている部分があると思うんですね。これだけは絶対自分のバッティングにとってははずせないというものが、ついつい毎日やっていますと、ふっと忘れたみたいなことになるんですね。

調子をよくしようと思って、練習しているうちに、ふっと思い出すことがあるんですね。それで、急に調子が良くなることもありますし、そうじゃなくて完全に崩れちゃっている場合もあります。それはやはり、元へもどすようにやさしい球を打ちながら、自分の感覚を、何というんですかね、正しくしていくということですね。やはり、打つことで調子が悪くなった場合は、打つことで抜けるしかないと思います。

問　王さんは巨人へお入りになった時は、ピッチャーになるつもりでお入りになったんじゃないですか。

王　はい、そうなんです。あの当時は水原監督で、川上さんが打撃コーチで中尾さんがピッチング・コーチということでしたが、３人で相談なされて、もうあいつはどうもピッチャーとしては駄目だということで、ちょうど宮崎キャンプうち上げの前日に、「もう、明日からピッチャーをやらなくていいから」といわれました。やっぱり、さみしかったですね。

問　しかし、どちらが幸いしたかわからんですね。

王　そうですね。ピッチャーだったら、もうとっくの昔にユニホームを脱いでいるんじゃないか、と思います。

問　川上さんはいくつまでやられたんですか。

王　やはり37才、38才ですか。長島監督は38才まででしたが。

問　王さんご自身はいくつぐらいまでやれそうですか。

王　そうですね。小さい時から自分が好きで好きでしょうがなくやって来たことですので、出来ればいつまでもやりたいんですが、やはり、いわゆる王というイメージがあると思います。ですから、自分としてはあまりホームランが打てなくなったり、打率が悪くなったりしたら、なかなかやりにくい立場になるんじゃないかと思います。まあ、ファンの方はいろいろおっしゃると思うんですが、やはりその時に自分がどう思うか、まだ、今現在はそういったことまで考えてませんが、やはりそういう試練の時というか、まあ、決断する年というのはいつかは来ると思います。ただ、１年でもそれを先に追いやりたいとは思います。

問　王さんのホームラン記録を拝見していますと、30本までは何かこうモタモタされているようですが、30本から40本がわりと早いんですよね。毎年、何かそんな気がするんですがね。

王　自分としては、やっぱり早く、出来ればオールスターまでに、35本とか40本ぐらい打って、その後はのんびりやりたいと思うんですが、どうも自分の思うことと正反対でして、今年もオールスターまではやっと２５本ということでした。80何試合かを消化した時点では、若い田代君とかブリーデン選手にだいぶ抜かれていまして、どうも、その、尻に火がつかないとエンジンがかからないみたいで、これじゃいけないと思うんですが。

問　30本過ぎるとエンジンがかかってくるのかな。

王　そういうわけじゃないんですが、やはり、ゴール近くなりますと、自分としては１年間40本というのを最低のノルマとしていますので、それが危うくなって来た時に何か、やっと本腰を入れてというか、最初から本腰を入れてやっているつもりなんですが、結果からみますと、前半は考え方にちょっと甘いところがあるのかな、と自分ではちょっと反省しています。

問　王さんがバッターボックスに立たれた場合、まあ、ほとんどのチームが王シフトをとりますね。チャンスのときなんか、レフトの方へ流してもいいんじゃないかという気持ちがするんですけど、そういう気持ちは全然お持ちじゃないんですか。

王　あのシフトをしかれましたのが、ちょうど僕の６年目ですから、一応それが13年ぐらいずっとしかれているんですが、最初しかれ

た頃は、もう全然そんなことを考えませんでした。とにかく、狭ばめられれば狭ばめられるほど、そこを抜くんだという気持ちでやっていましたが、この頃はそれほど、こう堅い気持ちでないというか、今は少し柔軟性が出まして、時には向こうへ打とうという気持ちが出てきたんです。が、どうも僕が一本足でボールを打った場合は、自然に打球がライトの方向へとんでいってしまうんですね。ですから、意識してそちらへ引っぱって打とうとしているんじゃないのです。自然な打ち方をするのが一番結果もいいと思います。左へ流そうとしたりなんかした場合の方が、結果も悪いと思うんです。やっぱり、僕は普通の打ち方をした方が確率がいいと思いますので、そのようにやっております。

問　レフトの方へ流したりすると、やっぱり調子が狂ったりすることがありますか。

王　そんなことはないんですが、やはり自然に自分であまり意識しないで打つのと、意識して向こうへ打とうとするのでは、かなり違いが出てくると思うんですね。ですから、自分の普段やっている打ち方をした方が、僕の場合は好結果に結びつくと思います。

問　自然体ですね。

王　はい、そうですね。

問　一本足打法なんですが、王さんがやられてホームランがあれだけたくさん出ている。だから、他の人がやれば、その人も出ると思うんですけど、なぜ王さんだけに出来て、他の人に出来ないんですか。

王　これは自分なりの勝手な解釈ですが、他の人は一本足で打てばホームランが打てるだろう、ということで変えると思いますね。まあ、僕という先例がありますので。僕の場合は、もうどうしてもうまく打てないので、何か一つ、その、何かいいタイミングを取る方法として、一本足を始めたわけです。ですから、ホームランのことは考えませんでした。タイミングのことだけを考えたわけです。もちろん、これは一人でやったのではなくて、皆さんご存知の荒川コーチとマン・ツー・マンで約10年間一緒にやったわけです。

ですから、もし感じがよくなったら、また元にもどすつもりだったんですね。ところが、それをやっているうちに思いもよらないホームランが量産となり、また、ホームランにならないにしても、自分の力が本当にボールに伝わるようないいタイミングでボールを捉えられるようになったのです。他の人も、もう少し、たとえば、ちょっと一本足でやって打てないから元にもどしちゃうという場合があると思うんですけど、もう少し自身で取り組めばうまく打てる人も出てきたかもしれません。

どうも王のように打てないと一本足というのは、そいつに向いていないんじゃないか、と周囲も解釈しがちで、それで長続きしなかったりするのではないでしょうか、ホームランということが頭にありながら、バッターボックスに立った場合には、やっぱりホームランに結びつかないんじゃないかと思います。ホームランというのはあくまで結果で、ピッチャーの投げてきた球を、いかに自分がそのボールを思い切って引っぱたくかということがすべてで、その結果ホームランになるか、ピッチャー・ゴロになるかはわからないわけですね。結果を考えて打つと、かえって自分のバッティングが出来ないと思います。

まあ、僕も一本足というのはかなり難しいものだと思います。他のバッティングに比べれば、余分な動きも多いのです。ですから、やっぱり僕が誰か若い選手にバッティングについて種々話す場合でしたら、一番単純なバッティングをすすめます、余分な動きのない。もう、本当これ以上削りようがないというぐらいに単純なバッティングが、一番バッティングとしての完璧なものに近いんじゃないかと思うんです。僕は自分で一本足で打っていますけれど、他の人には決してすすめる気持ちはありません。その人その人が一番いい、一番打ちやすい打ち方というものを、やっぱり自分で捜すことが一番じゃないかと思います。

問　ピッチャーはやっぱりあなたのタイミングを崩そうと思って、いろいろ投げ方を変えてくるんでしょうね。

王　でも、僕のタイミングを崩そうということは、その人も自分のタイミングが崩れるわけです。ですから、あまりそういうことは考えないんです。

問　王さん、何か、あなたはいつも力を入れるんで、奥歯が悪いんですって？

王　僕だけじゃなくて、野球選手はだいたいが悪いんじゃないかと思います。ある程度瞬間的に「ガッ」と力を入れるような仕事をしている人は、どうしても奥歯を噛みますから。歯医者さんの話だと、歯というのは外側は硬いそうですが、中は柔らかいんだそうです。それが常にこう、歯をくいしばっている人というのは、中までが硬くなっちゃうんだそうです。

問　やっぱりくいしばっているわけですか。

王　瞬間はやっぱり。打った瞬間の写真を見ますと、かなりの形相をして打っていますので……。

問　王さん、ちょっと野球の話と違うんですが、お父さんが男の子をみんな技術者にして、自分の祖国のためにという気持ちで育てたという話を聞いたんですが、今、王さんは、そのお父さんの気持ちをどんなふうに受けとめていますか。もし、差しつかえがなければ話してください。

もう一つは、ガラリ話が違うんですが、ベース・アップに関してなんですが、王さんはやはり収入についても最高記録をつくってやろう、というくらいの気持ちでやっていくつもりですか。

王　最初の質問ですが、実は父は小学校にも行っていないんです。当時の中国というのは、かなり生活するにも苦しいような時代だったらしくて、そんな中で父は両親に早く死なれ、伯父さんの家に世話になっていまして、朝から晩まで働いて、ご飯なんかも、その、あんまり腹一杯食べさせてもらえないような生活をしていたらしいのですね。それで、18か20才か、ちょっと年はよく覚えていませんが、その頃にどうしてもそこでは食べて行けないということで、友達と一緒に日本へ渡って来たんだそうです。日本でも肉体労働者や日雇いみたいなことをして、苦労に苦労をして、今のお袋と結婚しまして、一坪の店から始めたそうです。

それですから、金のありがたみとか、それから学問の大切さとか、そういったことを非常に強く感じていたようです。

ですから、まず僕らにいいますのは、とにかく学問をしなければいけないということと、物を大事に、まあ、お金もすべてですけど、とにかく大事にしなさい、ということです。こういうことを小さい時からいわれてきました。自分に学問がないものですから、息子に学問なり、技術なりを身につけさせて、自分の国に帰って、その、少しでも国を良くしたい、と考えていたようです。自分が育った中国というものを、子ども心にもやはり良くないものと感じていたのではないか、と思います。

そういったことで、僕らが小さい時から父の気持として、そういうことを吹きこまれていたんですね。兄はその通りに医者の方向に向かっていったんです。実は僕も理科系の方に進むつもりでいたんですが、野球というものをやり始めちゃったんで、道から逸れたんですが。

父の気持ちは僕は今でも同じだと思います。ですから、僕はたしかに父の本当の希望には沿えなかったんですが、僕も自分なりに一生懸命やることによって、皆さんに喜んでいただくという面での仕事をやっていますので、父も理解してくれていると思います。

それから、ベース・アップのことですが、僕はいまだかつて給料を上げるために野球をやったことはないので、いかに相手のピッチャーとの勝負に勝つかということだけを考えてやって来ました。いつの間にか、あの、お金を追いかけるより快感を追いかけた方が、技術的な向上にとっても人間的な向上にとっても近道だと思うんですね。よく鶴岡さんにがグランドにはお金落ちているのだから、それを拾う努力をしろということをいわれましたが、本当に自分が一生懸命やらない限り、お金というのはついて来てくれないんですね。また、実際にいい結果を出しませんと、お金はついて来てくれません。お金のことばっかり考えながら野球をやっても駄目なんですね。皆さんもやはり、給料のことばかりを考えて仕事をなさってはいないと思います。自分がよい仕事をしたかどうかということを毎日のように自問自答しながらやっているところに、お金がついて来るんだろうと思います。

問　日米野球の差というのをどういうように感じていますか。

王　そうですね。一部の選手は大リーグへ行っても活躍出来ると思いますが、トップ・プ

ロとしての立場が維持出来るかどうかは、疑問だと思います。来日したアメリカの選手のプレーをみていると、ものすごく差を感じるんです。脚力、それから打ったボールの飛距離、外野選手の肩だとかですね。が、これはやはり、そういった環境に置かれないと、引き出せない部分というものもあると思いますが。

野球のボールは、だいたい0．4秒ぐらいでピッチャーの手元からキャッチャーのミットへ入るわけなんですが、たとえば、これが0．3秒になれば0．3秒の世界なりのバッティングというものが出来ると思うんです。ですから、アメリカ野球の中に入ってみないと、日本の選手が本当にどの程度の力を発揮出来るか、というのはわからないと思うんです。今はむしろこっちで力を発揮出来なかった人が向こうへ行ったら良くなってみたり、いままで日本で良かった選手が向こうへ行って案外打てなかったりするわけです。

すぐに日米決戦といってもなかなかむずかしいと思いますが、交流試合をどんどんやることによって、その差がもっともっと近づくと思うんです。交流試合も秋のシーズン終了後にやったのでは、先方も観光気分でやりますし、こちらもなにか、シーズン中よりも気が乗らないような感じでやっていますので、本当の力は出ないと思います。ですから、正式な試合、それを何も名づけてワールド・シリーズとしなくても、やはり真剣勝負という意味での試合をやっていくことによって、今、僕らが感じる日米の差というのももっと小さくなるのではないかと思います。

即ワールド・シリーズとか、即世界一決戦とかいうことではなくて、それはいずれということで、もっともっと真剣勝負の交流をすれば日米のレベルは近づくのではないでしょうか。

問　選手の気質ですが、最初入られた頃と今とではどういう違いが感じられますか。

王　これはある程度個人差がありまして、すごく向上心が強い人もいますが、一般に自分の先を読んでしまう選手もかなり多くなっているようですね。やる前に何か読んでしまうというか。たとえば、今のジャイアンツの場合ですと、現在レギュラーで出ている人を抜いていこうという気持よりも、今のところはちょっと無理だな、と先を読んでしまう傾向が、前よりは多いような気がします。もちろん、練習はやっています。若い選手ほどたしかに年輩の選手よりはやっていますけれど。しかし、自分の今上にいる選手を何とかして追い抜いてやろう、という気持が少し欠けているような気がします。練習をやっても、それがなければやっぱり本当には抜けないと思います。いくら技術だけを研こうとしても、本当になんとしてでもあの人を抜いてやるんだ、という気概がないと、本当のものは身につかないんじゃないかと思いますね。

問　王さんは、デッド・ボールの数が非常に少ないんですよね。一本足で立っている人の方がよけやすいはずですね。デッド・ボールの少ない秘訣はどんなところにあるんですか。

王　長年やっているうちにだんだんよけ方がうまくなって来たということですね。まずこれが第一だと思うんです。それと、僕の場合はどちらかというと、インコースの方を打つのがうまいんです。ですから、相手のピッチャーもあまりインコースへ投げて来ないんですね。前は、10年くらい前までは僕もデッド・ボールが多かったんです。その頃は相手のピッチャーもどんどんインコースへ投げて来たわけです。

やっぱりインコースが弱いと思われているバッターには、どうしてもインコースが多い、だからどうしても当たる率も大きくなると思います。だから、まずデッド・ボールを少なくしたかったら、インコースを打つ練習をして、まず、放らせないことだと思います。

問　王シフトに対して、あの狭い間を抜いてやろうという気迫には感心したんですけど、逆に今そのようなことはあまり考えなくなったというのはどういうことなんですかね。

王　やはりチームにおける立場ということが関係していると思います。あの頃は長島さんがいたりなんかして、自分はただ普通に打つことによって引っぱっていけばいいんだということだったんですが、今の場合は打つだけでなくて、勝ということにいかにして結びつけていくか、ということを考えなければならない立場になっているものですから。立場々々によって考え方というのは変わると思います。

問　王さんの人気の秘密、それから756号のあのたいへんな騒ぎの社会学的考察、ご本人はどんなふうに……。

王　人気の秘密というのは自分ではわからない、と思うんですね。一般に、人よりボールを遠くへとばすとか、遠くへ投げるとか、ものすごく速い球を投げるとか、そういう自分に出来ないものをやる人間とうのに、人はすごく関心を持つと思いますが。

それから、756号の場合は、僕自身も本当はあれだけ熱狂的に盛り上がるとは思っていなかったんです。どちらかというと、皆さん方の力によってあんなになった部分もあると思うんです。はっきりいって、僕自身は756というのは世界新記録だ、という意識は持っていません。ですから、最初はむしろ戸惑いがありました。そのムードに自分も乗っていっていまおうと思って、初めてプレッシャーというのも感じなくなりました。それによって、自分の力通りのバッティングが出来たんですね。

問　いずれ現役から引退することになんでしょうけど、その後やっぱり一度は監督業ですか。

王　たしかに２つ考え方があると思うんです。ここまで来たのだから、そこ（監督）までやってみたい、という気持もあります。それから、これだけ一年中２月から11月いっぱいまでずっと夏休みもとれないで、土曜、日曜でも子ども達と遊ぶことも出来ない生活というか、常に人に見られているという仕事をやっていると、１年でも２年でもいいからとにかく現在の仕事からまったく離れてみたい、という考えもあります。

まあ、先行きどうなるかわかりませんけど、今は離れたい、という気持の方が強いですね。無い物ねだりですが、やはり少し静かな生活を送ってみたい、という気持があります。

問　王さんは絶対審判に文句をいいませんね。

王　まあ、審判も人間ですからね。僕自身もミスしますしね。ど真ん中のストライクがきたからといって、必ずしも良い当たりができるとうわけでもないんです。審判も人間でミスします。ですから、僕はツー・ストライクまでは、あんまり文句をいわないんです。やっぱり、スリー・ストライク目はちょっと困るので。いたずらに審判を刺激することはしません。審判も実際はしまったと思っているわけです。ですから、それをあまり「ギャー、ギャー」というと逆効果になりますし、やっぱり長い間やっていますと、人間ですから、変な話ですが、人間関係もできてきますよね。実際に仲良くするとかどうとかでなくて、その選手のタイプとか何とかで。

問　バッターボックスの中で、よくキャッチャーと何か話しているようですが……。

王　時々自分の見逃した球が、自分としてはだいぶ外れているつもりでも、キャッチャーはものすごく惜しいというような感じをします。だから「ボール１個ぐらいははずれていただろう」というと、「いや、ほんのちょっとですよ」とかね。それから、自分が打ったボールがストライクだったかボールだったかを聞いたりします。まあ、僕らが聞くと本当のことを話してくれますので。それでまあ、ある程度自分の感覚を修正したりするんです。本当は話しちゃいけないことになっているんですが。

問　いけないことになっているんですか。

王　相手の選手や審判とは話しちゃいけないことになっているんですが、どうも駄目ですね。そういう点では。

問　ランナーともよく話しているようですが。

王　それも本当はいけないんですが、やっぱりあまり顔ぶれが変わりませんで、しょっちゅう会っておりますもので、つい、いけないとわかっているんですが。駄目ですね。

問　王さんは人の好き嫌いが激しい方ですか。それとも、非常に恬淡としておられる方ですか。

王　僕はあまり好き嫌いのない方だと思います。

問　いつも感情を、多少押さえておられるように見うけられますけど、自分でどうしようもない怒りなんかを爆発させたことはあるんですか。

王　それはありますけど、何か長くやっているうちに、何か自分の性格に入っちゃったみたいな感じで、意識して自分で押さえるということでなくて自然に何か……。決して自分

で押さえている気はないのですが、何かその、感情の起伏がものすごく狭いような気がしますね。ですから喜ぶときもあまり……。感情に乏しいというんですかね。自分では感情をそのままだせる人が本当にうらやましいんです。

何か、高校時代からまあ、甲子園に出たりして、皆さんから注目されたせいか、まあ、ちょっといい子を意識しすぎてか、そのままそれが自分の性格に入ってきてしまった部分があるんじゃないか、と思っています。自分自身の性格はあまり好きじゃありません。

問　家庭で奥さんをどなったりすることはありますか。

王　家ではやっぱりやりますね。ですから、本当の僕についてはやっぱり女房が一番知っていると思います。何か外ではー先ほど話したように意識して押えるという部分は少ないんですがーもめごとはあまり好きな方じゃないですし、自分がよほどマイナスしない限りは、自分がちょっとしんどいくらいのことで、相手が喜んでくれたりプラスになったりするんだったら、そうしてやろうじゃないか、という考えはあります。

問　食べ物などについてはやっぱり相当好き嫌いがあるんですか。

王　特別に好き嫌いはありません。食べたい物を食べたい時に食べる、という主義です。それが僕は一番の健康法だと思うんです。真夏なんかの場合は、その、スタミナをつけるからといって、わざわざステーキを食べることはないと思います。その時自分が冷やむぎを食べたかったら冷やむぎでもいいと思うんです。自分が食べたいものを食べた方が体の負担にもなりません。

問　献立は奥さんはお決めになるんですか。

王　大体女房が決めますが、僕の場合は今日何が食べたい、ということを出かける前に普通いっていきますから。

問　ご家族をマスコミに出さないよう、たいへん苦労していらっしゃるというお話を聞きましたが。

王　皆さんの要望に答えていると、もうきりがないわけですね。僕の場合は仕事ですからいいですけど、子ども達までということになると。まず、子ども自身が自分で勘違いしますね。自分は何か特別だという感覚を子どもに持たれても困りますし、子どもはごく普通の子どもとして育てたいんです。後で本人が可愛想だと思います。自分としては男の仕事としてやってるつもりですので、家庭のことは切りはなして考えていただきたいと思います。

問　王さん、変なことを聞きますが、プロ野球には八百長は絶対にありませんか。

王　あるとかないとかじゃなくて、出来ないんじゃないかと思います。ボールとバットというものがありますから。ピッチャーにしてもど真ん中に投げようと思って投げられるものじゃありません。バッターの方でも真ん中にくることがわかっいて、まさしくど真ん中にきたとしても必ずしもそれをヒットに出来るわけではないのですね。ボールとバットがなければその可能があるかもしれませんが、ボールとバットがありますのでそれはちょっと無理だと思います。

問　王さんにもブロック・サインというのは出るんですか。

王　出ますよ。

問　ただ打てというだけじゃないんですか。

王　そうじゃないです。数は少ないですが。

問　ブロック・サインというのは毎日変わるわけですか。

王　毎日というわけじゃないですが、サインというのは大体５種類くらいありまして、たとえば、それをＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅとつけておきまして、今日はＢでいくとか、今日はＣでいくとか、とうことになるわけです。ただ、最初今日はＡでいこうということでやっていても、何かちょっと相手に盗まれているようだ、というときは、すぐそれじゃＢでいこうというように変えることもあります。

問　ゴルフでも一本足打法というのを試されたことがありますか。

王　いやいや、ゴルフではありません。

問　ゴルフは右ですか。

王　ゴルフはボールが止っていますから、最初やさしいだろうと思ったんですが、やってみたら、止っているボールだからこそむずかしい、ということがわかりました。

問　王さんは時々３番と４番と打順が変わりますけど、ああいう場合はどうですか、変化というか、変わりがありますか。

王　そうですね。その変化をつけるために何か打順を変えているようですけど。『４番　ファースト王』と場内発表がありますね。あれがあって初めて「あっ変わったんだな」というくらいで、事前にはいわれないんです。「あれっ」と思う程度で、特別３番になったからどう、４番になったからどうということはありませんですね。

問　どっちがいいですか、３番と４番と。

王　そうですね。まあ、僕は３番の方が、ずっと長い間、長島さんとの時にＯＮでやっていましたので、３番の方が慣れていると思うんですか、まあ３番の方が居心地がよいようですね。

問　王さん、毎日のゲームというのは楽しんでやっているんですか。私達が野球をやるときは趣味ですから、楽しいんですけれども。仕事でやっぱりうまい原稿が書けない時は時々嫌になりますけど。

王　調子のよい時は、軽やかに球場に向かえるんですが、調子の悪い時は「雨でも降らないかな」とかですね。そういうように思いましても、それでも現実にやらなきゃなりません。まあ、そういう時は自分の尻をたたくような気持ちで、何とかきっかけをつかみたいというようなことでバッティングをしたり、走ったりということで、自分の気持ちを盛り上げるようにしながらやっています。

やっぱり仕事というのは楽しくやれるものじゃないんじゃないですか。とくに長いですから、１年やっていますと、やっぱり何かきつく感じる部分の方が多い。

問　今でもちょいちょい日本刀は握られるんですか。

王　この頃はあまりやらないんですが、前はワラを切ったりもしましたけど。バットというのはそれこそ四六時中握っていますから、新鮮味がないんですね。そういった意味では刀を持って振ってみたり、天井から紐を吊して、そこに新聞紙を、これぐらいの幅に切って掛けておきまして、ちょっと回しておきまして、それがすーっと回っているところをタイミングをはかって、パッと切るんですけど、それが本当にうまく切れた時ははさみで切ったように切れるんですね。ところが、うまくいかない時はもう、何かこう、力でねじ切ったような形になります。すごく精神集中というか、タイミングをはかる必要があるので、バットを振る時とは違った緊張感があるようです。

調子の悪い時には、先ほどいいましたように自分が忘れている面というか、眠っている部分というのがこうすることにより、目が醒めるような感じがするわけです。

文責・編集部